東京学芸大学附属高等学校紀要　50　pp.5～16，2012

諷刺画（カリカチュア）から覗いた世界
―19世紀を中心に―
The World Viewed through Caricatures
― A Focus on the 19th Century ―

地理歴史科　山　川　志　保

<要旨>

高等学校で平成25年4月より実施される学習指導要領で，世界史A・B共に様々な資料の活用が求められている。本稿はこれを踏まえて行った，高校2年次の必修科目世界史Aでの諷刺画（ギルレイの「死の影の谷」，ドーミエの「七月の英雄」・「ガルガンチュア」，『Punch』掲載の「劇場支配人の部屋にて」）を活用した授業の実践報告である。この諷刺画を歴史資料の1つとして提示した授業実践により，生徒がその時代の人々に同じ人間としての共感や親しみやすさを感じ，より歴史に興味関心をもつようになる姿がみてとれた。

<キーワード>　諷刺画　カリカチュア　ギルレイ　ドーミエ　パンチ　学習指導要領　資料活用　ICT

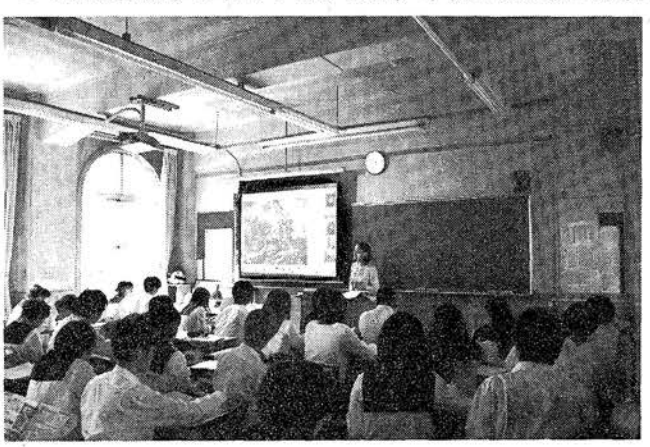
はじめに

高等学校で平成25年4月より実施される学習指導要領（以下新学習指導要領）では，世界史A・Bともに諸資料の積極的活用が求められている。東京学芸大学附属高校（以下本校）[1]では，近年全クラス教室にプロジェクタ及び巻き上げスクリーンが設置されて簡単にPCやDVDプレーヤーなどとの接続ができるようになったことや，新学習指導要領で全科目的に音声や映像機材，コンピュータや情報通信ネットワークを活用して学習効果を高めることが求められることもあって，ICT（Information and Communication Technology）を活用した授業実践が各教科で取り組まれてきた。[2]世界史の授業で画像や動画及び音声を活用すること自体は，既に教材用DVDやCDも存在しており，目新しいことではないと感じるが，新学習指導要領を踏まえて，ICTを活用しつつどのような諸資料を生徒に提示して学習活動に生かしていくかを再考してみたい。

ICTを活用した授業

授業内でDVDやCD，PowerPoint（以下PP）などを活用することで，動画・絵画・写真・地図・諷刺画，音楽・音声等を様々利用できる。これにより，授業内で取り扱う時代や社会，事件，人物等をよりリアリティある姿で生徒に提示できたり，プロジェクタに投影された事物をみながら生徒と双方向的に授業を展開できたりするというメリットがある。生徒が手元にプロジェクタで投影されたのと同じ資料を持っていたとしても，やはりその授業内の一体感は格段に違うと感じる。

だが一方で，限られた授業時間内でスピーディに授業展開をするためにPPを多用するという傾向もあるようだが，PPなどには大量の情報が盛り込める反面，受け手側の生徒がどの程度キャッチアップできるのかを充分に考慮する必要性がある。[3]生徒の中にはPPやDVDなどで教員側が一方的に大量の情報を垂れ流すのは授業ではないと思うとの感想を述べている者や，ノートの取りづらさを指摘する者もいる。また，本校のHR教室環境



では，教室を暗くしないとプロジェクタで投影された事物が見づらいという状況（前頁写真参照）にあることもあって，ノートをとる等の生徒の学習活動を考えると，授業時間内の大半をPPで授業するということは難しい。以上の点を考慮し，ICTを活用した授業を展開している。

諷刺画という歴史資料

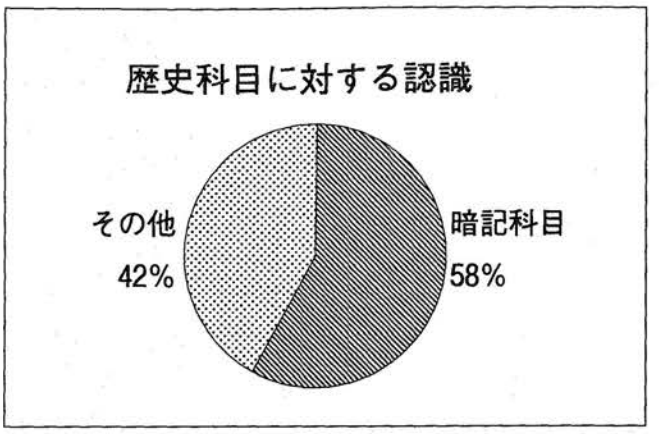
本校の世界史の授業では，アメリカ独立宣言，フランス人権宣言などの諸史料や様々な条約文などに加えて，新聞記事，日記文，外交文書にある会話文，個人の回想録といった文字資料や，絵画・写真・諷刺画・映画などの図像・画像資料など幅広く資料をとりいれている。

そのなかでも，諷刺画という歴史資料は，生徒の興味関心を引きやすい上，導入等にも活用しやすく，『Punch, or The London Charivari』（以下『Punch』）[4]のスエズ運河会社の株購入に関する「エジプトのモーセ」（1875年12月11日号）や「女王の新しい王冠」（1876年4月15日号）など様々な諷刺画が現行の世界史A・B教科書や資料集などにも掲載されている。

今回の授業実践例では，新学習指導要領の世界史A解説にある「近現代世界に対する多角的で柔軟な歴史の見方を養うために，歴史的な文献資料のほか，新聞，雑誌，パンフレット，生活用具，写真，映画，ビデオなど多種多様な資料・教材を適切に授業に生かすことが求められる」を踏まえ，世界史B解説にある「その時代の人々が自分たちの時代や社会をどうとらえ，どう表現しようとしたかに着目させるため，その時代に作成された資料を取り上げて追究させ，歴史的思考力を培うようにし，言語活動の充実を図ることにする」に着目した授業展開を構想している。ことに19世紀は，ヨーロッパだけでも『La Caricature』や『Le Charivari』[5]，これに倣った『Punch』などの諷刺新聞・雑誌や『The Illustrated London News』などのイラスト付き新聞等が様々発刊された時代である。そこからは当時の世相や人々の風潮，外へのまなざし等を感じ取ることができる。こうした，当時を物語る歴史資料としての諷刺画を授業に取り込むことで，生徒が何を感じたかをアンケート等を通じて検証したいと思う。

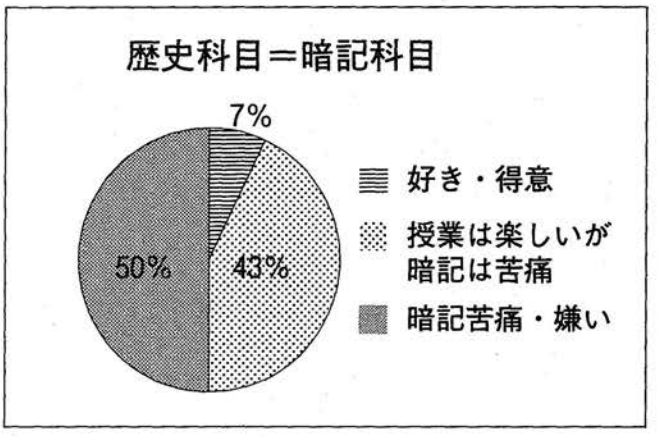
実践対象となる生徒の歴史科目に対する認識

授業実践をするにあたって，対象となる本校の第2学年（58期生）の歴史科目に対する認識を，1学期に対象となる生徒255名（山川が世界史Aの授業を担当する6クラス分）に自由記述形式でとったアンケートより



明らかにしてみたいと思う。（尚，以下アンケートの抜粋部分は生徒が記述したものをほぼそのまま使用した為，一部不適切な部分があることを予めお詫びしておきたい。）

このアンケートによると，世界史をはじめとする歴史科目が「暗記科目」と回答した者は58%いる。



そのうち「勉強量がテストの点数に一番着実に比例する。勉強すればテストがとれる。勉強していて分かるので楽しい」など7%が暗記も得意な上に歴史科目も好きと回答している。「自分の世界が広がる教科。昔の人々の知恵や思想が学べて面白い。テスト勉強はやりたくない…。授業中にマメ知識もふまえながら，講義を聴くのは面白いが，テスト勉強は範囲が広いし，覚えることも多いので大変。」，「歴史は暗記しなければならないというイメージが強いです。話は脈略があって面白いけど，結局暗記にたどりつくというような感じです。」といった回答や，「歴史科目は沢山の出来事を現在からみて学ぶようで，色々な時代の色々な人や考え方があってすごく面白いと思う。またたくさん出来事があるため，覚えるのが大変であるイメージ。」，「授業を聞いている分にはすごく楽しいのになぜかテストになるとうまく覚えていないという…。好きだけど困った教科です。」といった回答のように43%は，授業もしくは歴史科目自体は

楽しいが考査前の暗記は辛いと感じている。また，「かなり覚えることが多すぎだし，学ぶことが細かすぎてあまり好きな科目ではない。」，「暗記地獄←大嫌い」，「暗記が大変，基本丸覚え。あまりリアリティがなく，自分たちへの関わりを感じることが少ない。」のように，50%が暗記も苦手で歴史科目自体にも嫌悪・苦痛を感じると回答している。なかには，「歴史で大切なのは過去に学ぶことだと思うのに，科目としては単なる暗記が多い矛盾」という指摘をしている者もいる。

ここで対象生徒のいう「歴史科目＝暗記科目」の「暗記」についての記述に注目してみたい。「条約の文章や戦争の名前，年号などを暗記することは苦手で嫌いだ。」「つまらない。年号やできごとの名称を暗記することに一体なんの意味があるのだろうか。」などにみられるように，年号・歴史用語などの名称を暗記すると回答している者がいる一方，「暗記科目。でも１つ１つの暗記ではなく，流れの暗記。昔の人々が考えて行動した結果の学習となるので面白いと思う。またその結果がどう影響したかということを一歩ひいてみれるのがいいと思う。」，「一つ一つの事件を物語のようにつないで覚えられたら覚えやすいと思っている。」，「年号を覚えるのは大変だが，理由があって事は起こっているので，流れを覚えるのは楽しい。」といった，歴史の因果関係や物語性を踏まえて暗記すると回答している者もいる。前者のような暗記イメージの生徒の多くが，歴史科目に「苦痛。嫌い」などといったマイナスイメージをもつ場合が多いのに対し，後者の暗記イメージをもつ生徒の場合は，暗記の大変さを指摘する一方で，歴史の楽しさをも述べている場合が多い。

一方，歴史科目のイメージで「暗記科目」ではない回答をした者は42%いる。「人を中心にしている科目でもあり，様々な人の考え方や生き方を知れて面白い。過去を扱っている分，その時の対処の仕方などから今をもっと良い社会にしていくヒントがみつけられる。過去をみつめる，今，未来を見つめる上で大切。」「イメージは深く，広く，突き詰めようと思えばいくらでも探究できる教科。どんなに昔のことであっても，歴史をさかのぼっていくと現代に結びついているところが興味深い。」，「現在の広い意味のあらゆる文化を理解する基礎知識。」，「目の前にあるそれやこれだとかニュースに出てくるあれこれ－つまり全てのものが持っているものがその歴史であり，それを知りたいと思ったらまず歴史科目の学習は避けられない。授業で与えられる，知りたいと思うきっかけは楽しいものが多い。」，「歴史を学ぶとその国がどのように出来上がったのかが良く分かり，現在それらの国が抱えている政治的問題や社会的問題の根源的な理由を知ることができ，とても面白いと思う。」などといった回答が多くみられた。

もちろんなかには，「歴史を学ぶことによって，今の生活や社会で暮らしていく上でどのようなことに役立つのかが分からない。数学や英語は将来的に使っていくこともあると思うが，この授業はどのような目的があるのだろうか？別に反抗している訳ではなく，世界史に関しては個人的に面白いと思っている。」という回答もあった。このアンケートを通じて明らかになった生徒の「歴史科目への認識」が，１学期の授業実践を経てどのように変化したかをたどることで，歴史資料としての諷刺画の有効性を探りたい。

授業実践例－諷刺画から覗いた世界－19世紀を中心に－

今回の授業実践で扱うのは，現行学習指導要領[6]の世界史Ａ「(2)一体化する世界　ウ　ヨーロッパ・アメリカの諸革命　産業革命，フランス革命，アメリカ諸国の独立，自由主義と国民主義の進展，拡大する貿易活動を扱い，ヨーロッパ・アメリカにおける資本主義の確立と国民形成を理解させる」に該当する箇所であり，新学習指導要領では，「(2)世界の一体化と日本　ウ　ヨーロッパ・アメリカの工業化と国民形成　産業革命と資本主義の確立，フランス革命とアメリカ諸国の独立，自由主義と国民主義の進展を扱い，ヨーロッパ・アメリカにおける工業化と国民形成を理解させる。」とされている箇所になる。以下，**Ⅰフランス革命とナポレオン，Ⅱ七月王政と二月革命，Ⅲイギリスの自由主義改革と二大政党政治**　の授業における，諷刺画を活用した実践例を挙げる。本来であれば，各授業の授業指導案を記載すべきであるが，紙面の都合上省略させていただくことをお許し願いたい。また，本稿に記載された諷刺画は**転用厳禁**とさせていただくことを予めご了承いただきたい。

Ⅰ　フランス革命とナポレオン
～ジェームズ＝ギルレイ　「死の影の谷」伊丹市立美術館所蔵[7]　の活用例として～

１．実践前の授業

実践前の授業にて，ギルレイ（英/1756～1815）による「フランスの侵攻－または－ジョン・ブル“糞船”をぶっ放す」(1793年11月)[8]「巨人国プロブディングナグの王様とガリヴァー」(1803年6月)，「ボナパルト，敵前上陸48時間後の姿」(1803年)[9]，「プラム・プディング危うし」

(1805年2月) などを生徒に提示し，ギルレイという諷刺画家の諷刺の特性をその諷刺画自体から感じてもらうとともに，特にナポレオンに関しては，ギルレイが「ちびのボネー」と渾名をつけ諷刺していたこと等を生徒に紹介している。また，事前の授業で，ダヴィドの「サン＝ベルナール峠を越えるナポレオン」(ドラローシュ作との比較含む)・「ナポレオンの戴冠式」なども取り扱っている。こうした絵画などを含む資料を事前の授業で使用した上で，今回の授業実践を行った。

2．授業実践

授業の導入で，伊丹市立美術館所蔵の「死の影の谷」(下図/1808年9月)[10] を提示し，グループで意見交換しながらこの諷刺画に描かれている諸動物等がどの国の表象にあたるかを推測するというワークを行っている。なお，「死の影の谷」は生徒に資料として配布するとともに，PPで提示している。これをみながら生徒は資料集や教科書，あるいは電子辞書などを利用しつつワークを進め，授業者がワークの途中いくつかでた質問をひろいつつ，注目してほしい視点などを補足しつつ作業をすすめている。(ワークを進めるにあたっては，この後の授業展開で利用する表象＝白熊・ライオン・ラバにまたがる死神・双頭の鷲・鷲等を優先し，時間内で分からなかったものは，授業者から説明するという形をとっている。)

生徒達には，諷刺画内の諸動物等がどの国の表象にあたるのかを答えてもらう際に，その根拠やその表象に感じたことなどを述べてもらうが，この際の根拠に加えてワークを行っている最中の生徒の様子からすると，以下のような形で諷刺画をみていることに気付かされる。

①なんとなくのイメージ
　…強そう，寒いところに住んでいそうな動物等といったイメージによるもの
②以前にみた経験のある諷刺画との照合で推察
　…殊に1年次に本校の生徒全員が履修する日本史Aや中学の教科書で取扱われているビゴーの諷刺画との照合を根拠に述べるケースが多い。
③諷刺画内の記載事項から表象を推察
　…生徒のワーク状況をみていると，①・②の段階が先に来て，隈なく諷刺画をみているうちに英語の記載に気付き，電子辞書をひくケースが多い。(但し，諷刺画周辺の記載事項は見えづらく，単語からの推察が多くなる。)
④地理的な位置と表象が描かれている場所が一致していそうだという点から推察。
　…①・②・③の段階を踏まえて，実際にいくつかの表象がわかった上で，資料集のこの時代の地図と見比べてこの点を指摘する生徒もいる。

このワークにより生徒からでた回答とその根拠・イメージは次の通りである。(なお，以下にあげる表象の説明中にでてくる諷刺画内の記載は英語そのままではなく，生徒には日本語訳を提示している。)

[白熊＝ロシア]
・日本史でみたビゴーの諷刺画でロシアだった！
・白熊＝寒そうなところに住む動物のイメージ
・大きい＝領土的にも大国のロシア
・拡大すると「RUSSIAN BEAR」と白熊の首輪にかいてある。
なお，この白熊の鼻に繋がれた鎖を，ライオンに飛びかかられたナポレオンは驚きのあまり落としており，その部分にも生徒には注目させて次の授業展開につなげることとしている。

[ライオン＝イギリス]
・強そうだから，イギリス！
・よく見ると背中に「BRITANNICUS」と書いてあるからイギリス

[双頭の鷲＝オーストリア]
・首輪に「GERMAN」と書いてあるが，この時代ドイツという国がない（大概，資料集の地図と照らし合わせて気付くか，これ以前の授業で神聖ローマ帝国の滅亡をあつかった際の説明を思い出して気付く生徒が多い。(実際に諷刺画には「GERMAN EAGLE」とある。)
→大きさからして，プロイセンよりもオーストリアのように思える。
(但し，プロイセンによるドイツ統一という点から，プロイセンと回答する生徒もいる。)
・双頭の鷲＝ハプスブルク家の紋章＝オーストリア
…漫画あるいは小説などから既に双頭の鷲がオーストリアの紋章であることを知っているという生徒からの回答にみられる。
なお諷刺画には「The Imperial Eagle emerging from a Cloud」とある。

[ラバに乗った死神＝スペイン]
・馬飾りに「SPANISH」と書いてあるからスペイン
(「TRUE ROYAL SPANISH-BREED」と実際には記載されている。)
・ラバに乗った死神の下に溺れている人がいることに気付く→Josephと書いてある＝ナポレオンの兄であると資料集などで確認
なお，このラバに乗った死神の姿が生徒には大変興味深い様で，「骸骨（死神）が砂時計を突き付けていて，ナポレオンに対しておまえのの運命はもう終わりかけているといっているようにみえる」との感想を述べる生徒もいる。こうした表象の姿を認識させて，後の授業展開で触れるスペイン反乱（半島戦争）につなげて，ゴヤの「1808年5月3日」や「戦争の惨禍」等の絵画資料・諷刺画を使用しつつ授業を展開している。

[落ちぶれた鷲＝プロイセン]
この表象に関しては,「カラス」と生徒が回答するケースが多くあり，授業者から「鷲」というと，以下のような回答がでてくる。
・双頭の鷲＝オーストリアだったから，この鷲はプロイセン
・鷲に見えないのに鷲＝ティルジット条約で屈辱的な状況にあるプロイセン
・羽がちぎれている？飛ぼうとしているように見える
この生徒の指摘通り，諷刺画の記載にも「Prussian Scare-Crow attempting to Fly」とあり，これと上記の生徒の回答をあわせて，フィヒテの講演「ドイツ国民に告ぐ」(史料の活用含む）やプロイセン改革につなげている。
以上が生徒のワークで最低限推察してほしい表象であるが，以下生徒の指摘やその姿から授業者が説明する事項を列挙しておく。

[ネズミ＝ライン同盟]・[蛙＝オランダ]
諷刺画の記載より指摘する生徒もおり，そこからナポレオンの大陸制圧の状況を再度確認している。

[三重の冠＝教皇]
・本校のカリキュラム上，生徒が三重の冠からローマ教皇をイメージするのは難しいようだが，その姿に興味関心を寄せる生徒は多く，印象も強いようで，後のフランス・第二帝政の授業で扱うナポレオン3世の諷刺画にこの三重の冠が登場すると，必ずと言っていいほどこの授業を根拠に指摘してくる。
なお，諷刺画には「Dreadful Descent of Roman Meteor」とある。

[ガラガラ蛇＝アメリカ合衆国]
・諷刺画には「American Rattle- Snake shaking his

Tail」とある。これを利用しつつフランス革命・ナポレオン戦争に対するアメリカ外交の姿勢を確認し，後の授業につなげることとしている。

[三日月＝オスマン帝国]

・諷刺画には「The Turkish New-Moon, Rising in Blood」とある。(なお，暗転部分(地球照)にはFrench Influence，三日月部分にはBritish-Influenceとある。)

なお，この授業の展開においては，1814年・15年頃にだされた，ナポレオンを揶揄するフランスの作者未詳の諷刺画も生徒には提示している。[11]

3　授業実践に対する生徒の回答

「ナポレオンの嘘丸出しの宣伝絵画と実際に近い絵画を見比べると，宣伝にとても力を入れていたんだなと感じました。ギルレイの諷刺画は表現がきついので少し抵抗がありましたが，当時の人はこれを観て面白がっていたのだと思うととても興味があります。」，「諷刺画はちょっとグロテスクだけど，ここまでやっちゃうのかという新鮮味があり，ナポレオンへの対抗心が感じ取れる。死の影の谷がお気に入り。諸外国に四方八方を囲まれて，頼りない顔をしているナポレオンがいい。ダヴィドに自分の良い格好ばかり描かせていたから，こういうよわよわしいナポレオンの諷刺画が気にいった。」のように，授業実践後の生徒の回答には，ダヴィドの絵画によるナポレオンイメージとドラローシュやギルレイの諷刺画によるナポレオンイメージの相違を感じたと述べるものが多い。「アルプス越えをするナポレオンが好き，かっこいいと思う。実際は絵のようでなかったのがちょっと残念。」との回答から感じられるように，「ナポレオン＝かっこいい」というイメージが生徒には強かったようであるが，この授業実践を通じて，多角的なナポレオン像を抱くようになったと思われる。

この授業実践で行ったワークにより，諷刺画への親しみだけでなく，ギルレイが様々な思惑や状況を踏まえて諷刺画を描いていることを感じたこともあってか，諷刺画を歴史資料として考える姿勢を生徒側が持つようになったと思われる。

また，導入のワークで学んだ表象が後の授業で使用される諷刺画にでてくると，すんなりとその状況を読み取れるようになり，諷刺画への敷居も低くなったと感じられた。

Ⅱ　七月王政と二月革命～ドーミエ「七月の英雄」「ガルガンチュア」の活用例として～

1　実践前の授業

フランス革命に関する授業で，現在のフランス政府公認のロゴ[12]（トリコロールの上にフリジア帽を被ったマリアンヌ像が配され，その下にLiberté, Égalité, Fraternitéの文字が記されたもの。）などを利用して，トリコロール（三色旗）や自由・平等の象徴でもあったフリジア帽，共和政の象徴であるマリアンヌ像などを生徒には提示している。また，七月革命の授業に際しては必ずふれられるドラクロワの「民衆を導く自由の女神」を提示し，ヴィクトル＝ユゴーの『レ＝ミゼラブル』にあるルイ＝フィリップの姿[13]などを文字資料で確認している。

2　授業実践

著作権及び所蔵権上の理由から
公開できません。

授業の導入に，ドラクロワの「民衆を導く自由の女神」を再び提示し，サーベルをもった民衆（ドラクロワと推定されるシルクハットの男性の傍にいる）と女神の傍にいるピストルを持つ子供に注目するように促す。その上で，PPを利用して，オノレ＝ドーミエ（仏/1808～1879）の諷刺画「七月の英雄」（上図/1831年6月）[14]をその題名→諷刺画の順で生徒に提示し，諷刺画内に描かれている人物の姿などに目を向けさせる。この諷刺画には，トリコロールが翻る議事堂がみえるセーヌ川にかかるコンコルド橋の欄干に立つ，七月革命で足を負傷してその自由を失い，公営質屋の質札で継ぎ合わされたコートをきた人物が，七月革命でバリケードを築くのに使用した舗石を丈夫な縄で自分の首に巻きつけている様が描かれ

著作権及び所蔵権上の理由から公開できません。

ていること[15]を授業者より生徒に説明する。また，この諷刺画自体，1831年6月と七月革命が起こって1年もしないうちに出されたものであることにも注目させたり，「民衆を導く自由の女神」自体も，ルイ＝フィリップが籠一杯のりんごと同じ値段で買い取り仕舞い込んだとの説があることを紹介したりしている。

これに加え，事前の授業であつかったヴィクトル＝ユゴーの『レ＝ミゼラブル』にあるルイ＝フィリップ像を思い出させつつ，シャルル＝フィリポン（仏/1800～1861）が裁判の際に描いたものを再現したとされる「洋梨のスケッチ」（1831年11月）[16]などを利用しながら，ルイ＝フィリップがその顔立ちから洋梨に似ていると揶揄されたことやpoiresには洋梨の意だけでなく，間抜けとの意もあることを提示している。その後，生徒に資料として配布してある「ガルガンチュア」（1831年/上図）[17]をPPで提示し，詳細を共にみていくことにする。

「ガルガンチュア」をPPで提示した時点で，以前に提示したルイ＝フィリップの諷刺画との照合から，生徒の多くがおまるにすわるガルガンチュアがルイ＝フィリップであると気付いていることが多い。その点を指摘する生徒の声を拾いながら，ガルガンチュアに扮したルイ＝フィリップの口元には民衆からかき集めた税が自動的に運ばれている様（諷刺画右側で展開する状況）とおまるからだされるルイ＝フィリップの排泄物＝特権に群がる，トリコロール翻る議事堂の前にいる議員達（諷刺画左側で展開する状況）などを見ていき，その上で，七月王政の実態などの説明を詳細に加えていく。

なお，この授業では，展開の最後に二月革命をあつかうが，この二月革命の説明後にドーミエが描いた「すげえや，ふっかふかだぜ！」（下図/1831年6月）[18]を生徒に提示して，ドラクロワの「民衆を導く自由の女神」に描かれたピストルをもつ少年と思しき人物が，この諷刺画でテュイルリー宮殿のルイ＝フィリップが座っていた玉座に座る様をみてもらうことにしている。

著作権及び所蔵権上の理由から公開できません。

3　授業実践後の生徒の回答

この授業実践では，ドラクロワの「民衆を導く自由の女神」からくる七月革命のイメージと対比する形でドーミエの諷刺画に描きだされた七月王政の実態を，授業者の解説を聞きつつ生徒に感じ取ってもらうことに主眼がおかれている。この授業展開に関しては，「「民衆を導く自由の女神」がCold PlayのViva La Vidaのジャケット[19]に使われているので親近感がわいた。」との回答にあるように，ここ数年の生徒にとっては身近に感じられる「民衆を導く自由の女神」の背景とドーミエの諷刺画との対比は感情移入しやすかったようである。だが一方で，「絵画・諷刺画・資料はそれらだけでは，半分の価値しかなく，よく知っている先生の解説が重要だと思います。」との回答のように，ナビゲーターとしての授業者の役割の重要性を指摘するものもみられた。

この授業に対する生徒の回答には，「革命に対する期待が表れたのが「民衆を導く自由の女神」だったのだろうが，結局は期待通りではなく，その失望が「七月の英雄」などに表れていると思う。」，「革命時の人々の熱気とその後の悲観的な見解が対照的。」，「「七月の英雄」について革命の難しさを感じた。背中から悲しみの感じられる1枚は，人間の力ではどうにもならない世の流れの力のむなしさが表れている。」，「「民衆を導く自由の女神」は市民の力による勝利というものが大きく描かれていたが，「七月の英雄」でみる民衆の力のなさというものが，イコール「ガルガンチュア」や梨王の絵での反発になっていると感じた」，「革命への人々の使命感・期待や昂揚を感じさせる「民衆を導く自由の女神」から一転し，「七月の英雄」やルイ＝フィリップの諷刺画からは政治に対する皮肉や無気力な印象をうける。大きな期待を寄せていた革命が，終わってみれば自分たちの生活にあまり変化を与えてくれなかった事実に，人々の落胆も大きかったのだろう。」などのように，七月革命に対する民衆の落胆ぶりやむなしさを感じたとのものが目立った。殊に，「「七月の英雄」は，タイトルだけ聞くと，英雄が勇ましく描いいてあるのかなと思うけど，実際見てみるとそんなに良い内容を描いたものではなく，英雄だったということがかけらも残っていなくて悲しい感じがした。」，「ドーミエの「七月の英雄」があまりにも題名とかけ離れた絵で，説明を聞くと更に辛い内容であったので印象に残っている。当時，七月革命に対する期待を裏切られた失望と生活の困窮がうかがえた。」との回答のように，ドーミエの諷刺画「七月の英雄」のタイトルと諷刺画自体とのギャップが大きな印象を生徒に与えたことがみてとれる。

また，ルイ＝フィリップに関する諷刺画に対しては，「ルイ＝フィリップの梨王の諷刺画は，最初英雄とされたルイ＝フィリップが見事にこけにされていて面白かったし，世論の転換の激しさを感じた。」，「ルイ＝フィリップも小馬鹿にされていて，民衆の不満がたまっていたのだろうと思いました。」，「梨王の諷刺画は革命後の民衆のがっかりと怒りを伝えるに十分だった。」などのように，民衆の不満が国王にぶつけられていることを述べるものが多かったが，一方で「(「ガルガンチュア」で）税金が口へ運ばれ大食漢になっているルイ＝フィリップをみて，彼に少し同情の念が起こった。」，「国の最高権力者となった人は，…このような皮肉をもって描かれてしまうのは少し可哀そうだと思った」，「諷刺画にされたルイ＝フィリップはなんだか可哀そうだと思いました。顔を揶揄され，いじられるのは自分的にはとても嫌だ。」とその諷刺の酷さに対する同情や不快感を述べるものもあった。なかには，「フランスって，フランス人ってくだらないよねと友達と話しました。けれど，人の顔をからかうなど今と何も変わらない当時の人々に親近感を覚えたし，その人間臭さで歴史が動いてきたのだと思うと，なんだか面白く思えてきて世界史がより好きになりました。」のように，諷刺画から当時の民衆に親近感を覚えたとの回答もあった。

Ⅲ　自由主義と改革―イギリス～『Punch』「劇場支配人の部屋にて」の活用事例として～

1　実践前の授業にて

イギリス産業革命の授業であつかった「コレラの王宮」(1852年9月号)「テムズ父さんがロンドン美神に子供たちを紹介－新国会議事堂の壁画デッサン―」(1858年7月3日号)「ロンドンの水浴びの季節－さあおいで！テムズ川じいさんのところにきて綺麗に洗いな―」(1859年6月18日号)[20]やウィーン体制期のイギリスの自由主義改革であつかった「ピールの安売りパン屋　1846年1月22日開店」(1846年1月22日号)[21]，アイルランド問題に関する「アイルランドのシンデレラと高慢な姉たち（イングランドとスコットランド)」(1846年4月25日号)[22]，1848年革命に関する「コックボートに乗る国王たち」(1848年4月8日号)[23]など『Punch』に掲載された諷刺画は授業内で度々使用してきており，授業実践が行われる段階で生徒にとっては比較的なじみやすい諷刺画となっている。この授業で取扱う19世紀の『Punch』の諷刺画の中には，『不思議の国のアリス』『鏡の国のアリス』の挿絵画家と

しても知られるジョン＝テニエル[24]の手によるものが多くあり，その点も生徒が『Punch』の諷刺画に馴染み易かったと思われる。

だが，授業実践前にみせた諷刺画の多くが，短いコメントしかついていないタイプのものや，「ピールの安売りパン屋　1846年1月22日開店」のように諷刺画内の記載事項から状況を知るというタイプのものが多かったが，今回の授業実践であつかう諷刺画にはセリフがついており，これと併せて諷刺画をみていくこととなる。

2．授業実践

著作権及び所蔵権上の理由から
公開できません。

MR.P.「Well, MY DEAR DRAMATISTS,
WHAT ARE TO BE OUR 'HITS'
FOR THE SEASON?」
MR.G.「I SHALL PROBABLY HAVE
SOMETHING OF A VERY SERIOUS
AND SENSATIONAL CHARACTER!」
MR.D.「AND I'VE A CAPITAL NOTTION
FOR A BURLESQUE, ONLY THE
PLOT ISN' T QUITE SETTLED!」

授業の導入に際しては，「世界中の人々が大博覧会に集まる」[25]「望遠鏡的博愛」(1865年3月4日号)[26]「イギリス文明」（フランスの「Le Grelot」掲載。ジンを抱え込んで酔っ払うヴィクトリア女王が，中国・アイルランド・エジプトなどを踏みつけている）などの諷刺画を利用してヴクトリア期のイギリスの特色・状況をつかんだうえで，二大政党政治の説明に移行している。

このパックス＝ブリタニカ期の二大政党政治の説明にあたり，『Punch』に掲載された「劇場支配人の部屋にて」（上図/1874年1月3日号)[27]とこれに付随するセリフの日本語訳を生徒に提示し，（なおセリフは生徒を指名して読んでもらう。）グラッドストン・ディズレーリ両者の政策の違いに注目させる。これを踏まえたうえでアイルランドに関するグラッドストンの諷刺画や「エジプトのモーセ」，「女王の新しい冠」，「聖ステファンのショー」[28]といったディズレーリ関連の諷刺画を利用しつつ授業を展開している。なお，説明に際しては，グラッドストン・ディズレーリの政策のみならず，近年明らかにされつつあるヴィクトリア女王と両者の関係や政策との関わり[29]などもからめて展開している。

3　授業実践後の生徒の回答

生徒の回答には，「それぞれの政策の方向性の違いがとてもよく表れていた。」，「面白かったし，分かりやすかったです！２人へのイメージが持ちやすくなりました。」，「着実に国内のことを進めていくグラッドストンと対外に色々なことをしていくディズレーリが脚本家としてうまく表現できていて面白いなと思いました。」といったように，諷刺画に付随するセリフもあって，自由党のグラッドストンとディズレーリの政策の方向性の違いが分かりやすかったというものが目立った。グラッドストン・ディズレーリ双方の諷刺画に描かれている雰囲気から，「2人の立ち姿からも２人の方針の違いが感じられると思った。」，「どの諷刺画でもグラッドストンはおかたい雰囲気で厳しい感じだが，ディズレーリはやわらかく柔和で，何事にも柔軟に対応できる雰囲気があった。」「片方（※ディズレーリ）がゴマをすっているように見えたので，ヴィクトリア女王にどのように気にいられていたかなどの関係性も表しているのではないかと思った。」，「政治を劇に例えているのが面白いと思う。グラッドストンとディズレーリ，女王の関係が劇の監督と脚本家の関係（立場的に）に似てるのだと思った。」との回答がよせられた。

また，「この諷刺画は，保守党も自由党も確固たる政策方針を持っているからこそ描かれているんだよなーと思った。」，「今だったら似たような政策ばかりでこんなことはない。」といった現在の日本の政治状況との比較からだされたと思われる回答や，「自分が観客ならディズレーリの方（といっても具体的なことを考えていない

様で不安だが…）を観たいと思うだろうけど，実際の政策的にはグラッドストンの方が良いと思う。」，「政策的にはグラッドストンの方が優れていた気がする。理由は，あくまで表面的に見えるのは結果論だから。」といった自分が当時の有権者であればどちらを支持したのかを考えた上での回答もみられた。

なお**授業実践例Ⅱ**のルイ＝フィリップに対する諷刺への印象もあってか，「２人の党首が交代で政治をしていることを人々は面白がっているのだが，その政策についてはその性格とともに好意的にうけとっていたのだろう。」，「面白おかしく描かれた２人はなんだかんだ愛されていたのだと思う。」，「国民は２人のバトルを楽しんでいたに違いない。」，「ディズレーリで遊んでいるような絵はたくさんありましたが，どれも彼を否定したような感じはなく，民衆は彼のことがそんなに嫌いではなかったんじゃないかなと感じました。」といった回答もあった。

また，「作者は自由党・保守党どちらの派なのか気になる。」のように，『Punch』の政治姿勢を知りたいとの声もあった。（なお，『Punch』自体はこの授業で取扱った時期は政治的な中立姿勢を保ったとされるが，ディズレーリの帝国主義を手厳しく非難したりもしたため，グラッドストンは1893年に『Punch』は自由党びいきと評したという。一方，ディズレーリは，「存じ上げてますわ！『Punch』でお見かけしたんですもの！」といわれた経験をもつように，この雑誌に掲載された諷刺画で広く顔を知られるようになり，自身をこきおろす諷刺画に親しみを覚えていたともされ，『Punch』に掲載された自らの諷刺画を全て保管していたという。[30]）こうした諷刺画を描いた人物ないしは掲載された雑誌の立場を考慮して諷刺画をみようという姿勢は，歴史資料を読み込む上で重要な視点であり，それを生徒が諷刺画をみる際に感じるようになったことにも気付かされた。

資料を用いた授業に対する生徒の認識

授業実践後に実施した，「諷刺画などの資料を用いた授業をどう感じるか」という生徒に対するアンケートには，「視覚から入った情報は頭の中で再現されやすく，非常に有意義である」，「19世紀のヨーロッパの様子なんて予想すらできなかったので諷刺画によって分かりやすくイメージがつかめるようになった」，「諷刺画を用いた授業は，歴史上の出来事をただ知識としてだけではなくイメージで覚えることができるので，様々な関連した知識を覚えられてとても良いと思う」，「言葉よりも印象がつよく残るので分かりやすかった。」，といった，諷刺画等の資料の視覚的効果を指摘する回答が多くよせられた。中には，本稿に記載した授業以外で音楽なども使用していることも踏まえてか，「歴史を深く理解するためにとても有効だと思う。五感を使うことで色々な実感がわき，生々しさを与えてくれる。諷刺画は絵の中の一挙一動に意味があって，時代を広い視野で（マクロ的な視点で）みることができると思う」との回答もあった。また，「印象に残るし，伝えたいことがわかるととても面白い。聞いているだけだと疲れてしまうので，参加できる授業でいいと思う。」と授業が双方向的になされる効果に言及するものもあった。「逆に資料を使わない歴史の授業とは何なのかがわからない。その当時の価値観，考え方がわかるのでいいと思う。」との回答もあり，本校の日本史Ａ（１年次必修科目）とこの２年次の世界史Ａの授業で，こうした歴史科目の授業スタイルが本校の生徒に定着しつつある様もみてとれた。

これに加え，「当時の人々がそれらの事件をどう感じていたのか，編集・修正されていない生の声を聞けるようで興味深かった」，「諷刺画は，その当時の人々の感情がダイレクトに伝わってくるので良かった。」，「ただ文章を読み取るものよりも格段に理解がしやすかった。また民衆の気持ちがよく反映されているのでおもしろいものが多く，当時の出来事の背景も理解しやすくなった。」といった趣旨の回答が多くみられた。「資料をつかうと当時の人々がその事柄についてどのように考えていたかということや，現代人とは違った見方をすることができて新発見になる。現代からみるこの時代とその時代からみての時代のギャップを教えてくれる教材になる。」とあるように，生徒の中には過去の人々との認識のギャップを楽しむ者もいれば，「諷刺画は自分たちとおなじ目線で物事をとらえているような気がして共感しやすかった。」，「諷刺画・絵画や文献は，その当時の人のリアルな心情がより伝わってくる感じがして，とても面白いです。「今とあんまり考えていること自体変わらないんだな」とかいうちょっとした発見も多々。」と あるように自分と同じ人間の思いに共感できたとの回答もあった。なおこうした類の回答には，「諷刺画は自分たちと同じレベルの一般市民がどう感じていたかということがうかがえるものだと思うので，反乱が起こった原因などを推察するのに参考になってよいと思う。」と書かれていることもあり，生徒の多くは自分たちを一般市民ないしは庶民ととらえていることも分かった。

歴史科目は暗記科目であり苦手，苦痛と答えた生徒の

中にあった「歴史科目は暗記が多く楽しくない。正直あまり良いイメージを持っていない。そのため苦手意識も強い。諷刺刺画をはじめとする資料は何百年も前のことをより身近に感じさせてくれるものなので，沢山取り扱ってほしい。当時の民衆の考え方などが頭に入っていた方が，歴史が単なる暗記から若干遠ざかってくれる。」といった回答のように，諷刺画をはじめとする資料を授業で活用することで歴史科目に対する苦手意識が和らぎ，興味を抱くことができたとの回答も目立った。こうした生徒の回答を踏まえると，諷刺画などの資料を活用し，その時代の人々が自分たちの時代や社会をどうとらえ，どう表現しようとしたかに着目させることで，同じ人間としての共感や親しみやすさを感じ，歴史に対する抵抗感が和らぎ，興味関心をもつようになるといえよう。

その他，授業内で提示される資料について「資料を使うことでその時代の歴史的背景を分かりやすく頭にいれることができる。また一律の考察を教え込まれるのではなく，自分なりの資料の意味をよみとっていける。」といった活用を指摘する回答もあった。

歴史資料としての諷刺画の課題と今後の展望

諷刺画を歴史資料の１つとして活用した授業を展開することで，生徒にとっては「リアリティなく面白みのないフィクション」（本来，歴史はノン・フィクションであるはずだが，殊に歴史が苦手な生徒からすれば，自身の知らない場所や時間軸の中で，興味のない登場人物が繰り広げる面白みのないと感じる歴史的事件や出来事は，つまらないフィクションだといわざるを得ない）に思えた歴史を身近に感じさせることができるのは先に述べたとおりである。

だがこうした効果を持つ諷刺画の活用にも課題はある。生徒からの回答に，「絵画・諷刺画・文章の資料には必ず作者の思いが表れる。政治への反感や立場上の対立からゆがんだ表現をされることもしばしばあると思う。だから当時の人々の思いを知るには，沢山の様々な史料を用意して比べる必要があるのではないか。」，「同じ出来事に対して複数の諷刺画を用いて様々な側面があることをもっと聞きたいと思う。諷刺画は芸術的なセンスという面でも見れるので，授業中に紹介されるのは素直に楽しめて良い。」とあったように，実際に諷刺画を授業に活用するには，多角的な視点を生徒に与えることや諷刺画の特性なども考慮すると，それ以外の絵画，歴史的文献資料もあわせて充実させていく必要がある。今回の**授業実践例Ⅰ～Ⅲ**においても，授業実践及び授業実践前後の授業も含めて諷刺画のみならず絵画・文字資料など様々な資料を多用しているのもそのためである。また，諷刺画は単に１点生徒に提示するだけでも興味関心を引くことはできるものの，こうして様々な資料と組み合わせることで，歴史資料として生徒に認識され，そうした側面からのアプローチがより一層強くなるとも感じられた。

今後の私自身の課題としては，諷刺画だけでなく視覚的な資料に比較してハードルの高い歴史的文献資料を活用する授業をも，生徒の実態にあわせてどう開発していくかであると思う。諷刺画をはじめ活用できそうな資料はたくさんある。その中から生徒の興味関心を引き出し，歴史に親しみをもってくれるよう今後も努めたいと思う。

[1] 教育課程並びに年間指導計画については東京学芸大学附属高校の HP を参照のこと。
http：//www.gakugei-hs.setagaya.tokyo.jp/

[2]「ICT を活用した各教科の授業―現代文・地歴・数学・物理・生物・英語・情報・総合的な学習の時間―　」東京学芸大学附属高校　研究紀要　48, pp. 97 ～ 128　や「フィールドワークを通じた 2 科目連携学習による「地域への主体的思考」を育成するための指導の改善―」東京学芸大学附属高校　研究紀要 48, pp. 11 ～ 24 参照
なお，掲載写真は第 2 学年での古典授業の様子。

[3]「新学習指導要領の理念に即した ICT 活用の可能性」東京学芸大学附属高校　研究紀要　49,　pp133 ～ 150 参照

[4] 1841 年 7 月刊行され、1992 年 4 月に廃刊されたイギリスの雑誌。19 世紀にはジョン＝リーチや『不思議の国のアリス』の挿絵でしられるジョン＝テニエル、コナン＝ドイルの伯父にあたるリチャード＝ドイルなどの諷刺画が掲載された。

[5] シャルル＝フィリポンが創刊した諷刺新聞。『La Caricature』は 1830 年創刊，35 年発禁処分となる。『Le Charivari』は 1832 年創刊，1927 年まで刊行された。この両紙で 19 世紀に活躍したのがオノレ＝ドーミエである。

[6] http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/cs/index.htm 参照。

[7] 本稿の「死の影の谷」は伊丹市立美術館に使用許諾を得て掲載しているものであり，転用は厳禁とさせていただくことをご了承いただきたい。なお，使用許諾に関しては伊丹市立美術館 http://artmuseum-itami.jp/ を参照のこと。

[8]『諷刺が語る－ 18 世紀英国事情　James Gillray』伊丹市立美術館，2000。

[9] 石子順著『カリカチュアの近代…7 人のヨーロッパ風刺画家』p. 21 ～ 22，柏書房，1993。

[10] 授業実践での表象の説明は『ジェイムズ・ギルレイ展』埼玉近代美術館 1997，や伊丹市立美術館の WebPage ならびに石子順著『カリカチュアの近代…7 人のヨーロッパ風刺画家』柏書房, 1993。を利用した。本稿にない表象の解説については，前者の p.126 参照のこと。

[11] 杉本淑彦著『ヒストリア 6 ナポレオン伝説とパリ ―記憶史への挑戦』山川出版社，2002。

[12] http://www.diplomatie.gouv.fr/fr/ などのフランス官庁 Web サイト参照のこと。

[13] 谷川稔ら著『世界の歴史 22　近代ヨーロッパの情熱と苦悩』p.70, 中央公論新社, 1999。や豊島与志雄訳『レ・ミゼラブル 3』, p.183 ～ 193，岩波文庫，2003。参照。

[14] 喜安朗編『ドーミエ諷刺画の世界』岩波文庫，2002。

[15] ユルク＝アルブレヒト著『ドーミエ』p22，パルコ新書，―1995。

[16] ユルク＝アルブレヒト著『ドーミエ』パルコ新書，1995。

[17] 石子順著『カリカチュアの近代…7 人のヨーロッパ風刺画家』p.50.，柏書房，1993。

[18] 喜安朗編『ドーミエ諷刺画の世界』岩波文庫，2002。

[19]「Viva la Vida or Death and All His Friends」2008 年 6 月リリース

[20] 小池滋編『ヴィクトリアン・パンチ』2 巻，p.67・68・73，柏書房，1995。
松村昌家著『「パンチ」素描画集― 19 世紀のロンドン―』p.97 ～ 141, 岩波文庫，1994。参照

[21] 小池滋編『ヴィクトリアン・パンチ』1 巻，p.54, 柏書房，1995。

[22] 小池滋編『ヴィクトリアン・パンチ』1 巻，p.120，柏書房，1995。

[23] 小池滋編『ヴィクトリアン・パンチ』1 巻，p.141 柏書房，1995。

[24] 1901 年『Punch』から手を引くまでに描いた諷刺画は 1860 葉，挿絵は 2300 葉にのぼったという。1881 年にナイトの爵位が授与された。なお『不思議の国のアリス』『鏡の国のアリス』との関連は，M．ハンチャー著『アリスとテニエル』，東京図書，1997。など参照。

[25] 東田雅博『図像のなかの中国と日本―ヴィクトリア朝のオリエント幻想』p. 12，山川出版社，1998。

[26] 松村昌家著『「パンチ」素描画集― 19 世紀のロンドン―』p.178，岩波文庫，1994。

[27] 小池滋編『ヴィクトリアン・パンチ』4 巻 p.35，柏書房，1995。セリフの日本語訳も掲載されているので参照のこと。

[28] 小池滋編『ヴィクトリアン・パンチ』4 巻 p.98，柏書房，1995。

[29] 君塚直隆『ヴィクトリア女王－大英帝国の“戦う“女王』，中央公論新社，2007。参照。

[30] 井野瀬久美惠「『ジュディ』から見た『パンチ』－ある諷刺漫画雑誌の挑戦」，小池滋編『ヴィクトリアン・パンチ』7 巻，p.47 ～ 69，1996。松村昌家著『「パンチ」素描画集― 19 世紀のロンドン―』，岩波文庫，1994。参照。